經濟論叢

第七十七巻　第五號

リカアドウの經濟學體系……岸本誠二郎（1）

新中國における人民幣デノミネーションについて……三木　毅（29）

マルクス＝エンゲルスのイギリス革命論(1)……尾崎芳治（45）

ゲオルク・ルカーチ「若きマルクスの哲學的發展について（1840—1844年）」……平井俊彦（62）

〔昭和三十一年五月〕

京都大學經濟學會

ゲオルク・ルカーチ『若きマルクスの哲學的發展について（一八四〇—一八四四年）』

Georg Lukács: Zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx. (1840—1844)

平井俊彦

一、まえおき

ここで紹介する論文は、東ドイツの哲學雑誌に收められているルカーチの『若きマルクスの哲學的發展（一八四〇—一八四四年』Georg Lukács; Zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx (1840—1844). Deutsche Zeitschrift für Philosophie. S. 288—343. 2. Jahrgang 1954. Deutscher Verlag der Wissenschaften, Berlin. である。ハンガリア生れの、この優れた思想家ルカーチ（一八八五年——）の多方面にわたる活動はあまりにも有名であるから、ここであらためて述べる必要はないであろう。[1] いまはただ、この論文のもつ思想史上の意義をあきらかにするために、ルカーチの社會科學方法論の基本的な考え方と、思想史研究の視角をごく簡單に示すにとどめよう。というのは、このことが、本文にのべる内容をより深く理解するに役立つからである。

このルカーチのマルクス研究は、まず、かれの社會科學方法論の視角からの必然的な産物である。という意味はこうだ。すなわち、第一に初期の著作である『歴史と階級意識』 Geschic

hte und Klassenbewusstsein. Der Malik Verlag. 1923. で、すでに自己の方法論的カテゴリーの中心をば、對象化 Vergegenstandlichung、または物象化 Verdinglichung においていた。[2] それは、いうまでもなく、人間が社會で生産的實踐、對象的活動をするばあいに生ずる、主體と客體との關係である。すでに二三年に、このカテゴリーを用いてイデオロギー論を展開したことは、きわめて鋭い洞察であったといえる。だが、このカテゴリーはこの時期には充分に成熟したものとはいえなかった。ルカーチはマルクスの『經濟學・哲學手稿』が發見されてからこの概念を「外在化」Entäusserung または「疎外」Entfremdung へと鍛えなおし、再びこれを社會科學方法論の基底にすえるのである。だからこの概念こそ、思想史研究のなかで前期の物象化概念を吟味してはじめてえられたものである。そしてこの吟味は、具體的には『若きヘーゲル』[3] Der junge Hegel—Ueber die Beziehungen von Dialektik und Oekonomie, 1948. とこの『若きマルクスの哲學的發展』でなされたのである。

このように、本書はルカーチ理論の内在的發展の產物である。だが、思想史研究についてみれば、これは『若きヘーゲル』研究の必然的結果でもある。この大作においてルカーチはヘーゲル辨證法の基本線を疎外のカテゴリーでおさえ、この考え方が經濟學の研究を媒介として生れたことを、『精神現象學』までのヘーゲル思想の展開のうちに實證しようとした。人間勞動による主體的活動の對象化というこの論理を基軸とするかぎり、ヘーゲル辨證法からマルクスの唯物辨證法へつながる要素が大きく取りあげられる。だからこの書物の敍述では、たえずマルクスが背後におかれ、ヘーゲルとマルクスとの關係に照明があてられている。ことに『精神現象學』と『經濟學・哲學手稿』との關係に力點がおかれているのである。したがつてこの論文もまた『若きヘーゲル』とおなじく、マルクスとヘーゲルの關係にもつぱら向つており、マルクス思想の形成にあたえたヘーゲルの影響をば、他のなによりも問題としていることは、あきらかである。この點で、このマルクス研究は事件や學說の羅列ではなく、唯物辨證法の形成という一定の視點からするものであつて、從來の單なるマルクスの傳記とは全く趣を異にするものといえる。とともに、マルクスの發展はドイツ的な形態でおこなわれ、他の諸思潮は唯物辨證法形成の契機としてのみみられることになるのである。

だが、ヘーゲルとマルクスとの關係が考察の中心におかれるとはいえ、『若きヘーゲル』とこの論文では取りあげ方が全くちがつている。このちがいとは、前者の結論で提起したにすぎない問題が後者の展開の中心をなしていることである。この意味でこの二つの論文は相互に補いあつて、一つの問題であるヘーゲルとマルクスとの相互關係を解いているのである。というのはこうだ。すなわち、前にのべたマルクスへ攝取されるヘー

ゲル辨證法の「外在化」の契機とは、いわばヘーゲルの積極面であつて、この側面が前者では考察の中心におかれている。もちろん、前者においてもヘーゲル辨證法がマルクスとの對決をとおしてみられているかぎり、その否定的な側面である觀念論的限界は强調せられてはいる。そして、ルカーチはヘーゲル體系に内在するこれらの二つの契機を、宗教哲學において分析し祕儀的な exoterisch 要素と公教的な esoterisch 要素の對抗を問題とする。祕儀的とは既成宗教を啓蒙によつて否定する、いわば革命的要素であり、公教的とは否定されたものを再びイデーで再興する、いわば妥協的要素である。論理的には、ヘーゲルにおける「外在化」と「止揚」との對抗なのである。だが、『若きヘーゲル』ではこうしたヘーゲル哲學の限界がしめされているにもかかわらず、ブルジョワ哲學史のヘーゲル解釋に對決しなければならなかつたために、その積極面がより强調せられているのである。そしてかれの限界である止揚の神祕性は、最後の結論でまとめて示されているにすぎない。とすれば、ヘーゲルとマルクスとはきわめて接近しているといえよう。だからもう一つの消極面の展開、つまりヘーゲル批判はもつぱら、『若きマルクス』の課題だつたのである。

『若きヘーゲル』と『若きマルクス』には、こうした補完關係がみられるが、またその反面にはつぎのような共通點がみられもするのである。ルカーチの方法論に立つかぎり、『若きヘーゲル』では唯物辨證法の萌芽が求められた、とおなじくマルクスにおいても、その初期から唯物辨證法の萌芽が求められている。この論文の分析の重點は、まさに初期の『學位論文』時代から、ヘーゲルのうち内にとどまつているとはいうものの、いかにマルクスはヘーゲル克服へとつながる線をふくんでいるか、という點なのである。この點はルカーチのマルクス理解をきわめて異色あるものとしている要素である、とともに、彼の思想史研究の方法論に立てば必然的に生ずる結果でもあろう。このことはこの論文のエッセンスであつて、初期マルクス研究について高く評價されねばならない。だが、このことは同時に缺陷でもあるので、のちに批判の指標點としてとどめておこう。

さらに『若きマルクス』には、ルカーチ思想史の基本線がつらぬかれている。『若きヘーゲル』では、マルクスへ批判的に摂取される辨證法的契機をヘーゲルのうちに求める、という點で、第二インター批判という歴史的課題をもつていた。とともに、この論文もレーニン的時期における思想史研究として、マルクス思想の形成のうちに、レーニンが確定したブルジョワ革命におけるプロレタリアートの指導性の問題と、ブルジョワ革命の社會主義革命への轉化の問題を取りだそうと努めている。ルカーチはブルジョワ民主主義者からプロレタリア社會主義へのマルクスの轉化を『ヘーゲル法哲學批判序說』で押えてい

る。もつとも、マルクスにおいてもまだ完全な形をとつていないのであるが。この點をルカーチは唯物辨證法形成の質的轉回にかかわらせて、敍述するのである。ルカーチが第一節から第六節まで並列的にのべている敍述を、われわれが第一節から第三節までを一くぎりにし、以下を別にしたのもこのためである。またこのような思想史研究の立場からでてくるもう一つの重大な特色がある。それは『若きヘーゲル』についてもみられるように、マルクス形成はプチ・ブルジョワ批判という形をとつてあらわれる。『學位論文』の段階からして、すでに青年ヘーゲル主義者との對決を問題としていることである。もつとも、フォイエルバッハだけはかれらと同列に單純にのべられているのではなく、唯物論者として、ヘーゲル觀念辨證法を唯物論的に批判した人として高く評價される。この點は、マルクス自身『經濟學・哲學手稿』でフォイエルバッハにたいしてあたえた評價に基づいていることは、いうまでもない。にもかかわらず、青年ヘーゲル主義（フォイエルバッハをもふくめて）批判という視角は、ルカーチの大きい論點なのである。すなわち、フォイエルバッハの人間學的唯物論の立場からのヘーゲル批判すら、マルクスの史的唯物論によるヘーゲル批判と對置される。だから、ヘーゲルの完全な克服はフォイエルバッハ的限界の克服なしにはなしえない、いいかえればフォイエルバッハの克服は同時にヘーゲル批判の完成を意味するものなのだ。とすれば、マルクスはヘーゲル批判の克服をフォイエルバッハ批判を媒介としておこなつた、といいうるのである。

最後に、もつとも重大な論點がのこつている。それはルカーチが辨證法の形成を經濟學にかかわらしめているという點である。この經濟學と辨證法との關係を追求するという視角は、すでに『歴史と階級意識』にあらわれているけれども、やはりはつきりと勞働による疎外の辨證法を展開したのは、マルクスの『經濟學・哲學手稿』の發見されて以後のことであつた。ルカーチはこの關係を『若きヘーゲル』で、イエーナ時代の諸論文を手がかりとして、ヘーゲルが古典經濟學をどのように研究したか、このことがヘーゲル辨證法の形成にどのような意味をもつものか、を實證した。ここでも、マルクスが唯物辨證法を完成しえたのは、實は古典經濟學の社會主義的批判に立つたからである、また古典經濟學批判の視角が、同時にヘーゲル觀念辨證法批判のそれであることをあきらかにする。兩者とも勞働の疎外という事實を認識した點では、マルクスにとつて大きい役割を果した。だからこそ、マルクスはヘーゲルを近代國民經濟學の水準にあるものと呼んだのである。だが、兩者ともブルジョワ的地平を克服できなかつたために、疎外の歴史的・概念的理解に到達できず、また、したがつて現實的止揚に達しえなかつた。ルカーチの中心論點からすれば、マルクスがヘーゲル觀念辨證法を克服して唯物辨證法を完成しえたのは、古典經濟學

批判をつうじてはじめて可能であつたのだ。つまり、マルクス辯證法における古典經濟學とヘーゲル辯證法における古典經濟學との對決が、この論文の最後のページを飾るのである。

われわれは以上でごく概括的にルカーチの思想史研究の特色から、いくつかの『若きマルクス』理解の論點をあげてきた。もちろん、わが國の研究者よりもはるかに廣い視野をもち、深い思索力をもつルカーチのことであるから、その特色は以上でつきるものではない。だが、重要な論點にはふれたつもりであるから、これらの諸點を念頭におきながら、『若きマルクスの哲學的發展』を追求すれば、つぎのようになるであろう。

(1) ルカーチの生涯と著作および社會科學論については、拙譯『階級意識論』未來社、の解說を參照せよ。

(2) 初期のルカーチの社會科學方法論における物象化の概念については、拙譯『物象化とプロレタリアートの意識』未來社(近刊)を參照せよ。そしてこの段階のルカーチの方法論的構造は、改めて『經濟論叢』で詳細に取りあつかうはずである。

(3) 『若きヘーゲル』については、出口勇藏編『經濟學と辯證法』ミネルヴァ書房をみよ。

二、Ⅰ『學位論文』から、Ⅱ『ライン新聞』をへて、Ⅲ『ヘーゲル國家哲學・法哲學批判』へ

マルクスのヘーゲル理解という視點からみると、まず一八四一年の學位論文『デモクリトスとエピクロスとの自然哲學の差異』Differenz der Demokritischen und Epikureischen Naturphilosophie から敍述がはじまる。そこにおいて、マルクスは思想の豐かさや深さという點で、他の急進的ヘーゲル主義者や同時代のひとびとよりもはるかと前進していた。通常のマルクス理解では、この時代のマルクスはヘーゲル哲學のらち内にあるか、青年ヘーゲル主義者 Junghegelianer の立場にとどまつているとされているが、この考え方にたいして、ルカーチはこの論文のうちにすでに、後に定式化される辯證法的唯物論 Dialektischer Materialismus の契機をみようとし、この點でヘーゲルや青年ヘーゲル主義者の立場に對決させるのである。そしてこのことが、政治的には三月前期 Vormärz におけるマルクスの急進的民主主義 Radikale Demokratie をば小ブルジョワ的なそれから脱脚させる要因となるのだ、という點を強調している。もちろん、この時代のマルクスは現實主義的、無神論的汎神論の立場に立つており、唯物論者ではない。だから、客觀的觀念論 Objektiver Idealismus と共通する地盤をもつている。だが、基本的な立場がヘーゲル的であるにもかかわらず、辯證法的唯物論への萠芽がみられるのである。唯物論的であるというのは、ヘーゲルがエピクロスをたんにヘレニズム的、ローマ哲學發展の副次的契機だとして位置づけているのにたいして、マルクス

は啓蒙家、無神論者とみ、人間を神の恐怖から解放した思想家として高く評價したことから、理解できる。また、辨證法的だというのは、次のことがあるからだ。エピクロスをデモクリトスからはつきり區別して、エピクロスの原子論のうちに辨證法への萠芽を求めようとした。すなわち、デモクリトスでは機械的な必然性があるだけであつて、エピクロスのように、人間に自由への道を開示する偶然を辨證法的にとらえようとする契機は缺けている。この兩者の對立は、時間の問題について兩者の理解がまつたくちがつている、ということにあらわれている。デモクリトスの自然哲學には時間が問題とはならないが、エピクロスでは時間は「現象を本質から分かち、それを現象として定立し、現象として本質のうちへ返すところの現實的形態」なのである。だから、エピクロスでは「人間の感性は體化された時間であり、實存するところの、感性的世界の自己内反省である」。このように考えると、エピクロスの原子論は單に自然認識にとどまるものではなく、人間的・社會的生活の領域にまで展開される素地のあることがわかるであろう。マルクスが人間的解放のイデオロギーとしてこの唯物論に共感したのは、エピクロスにこうした辨證法の芽がみられたからにほかならない。

以上のようなマルクスの個性は、次の『ライン新聞』の時代（一八四二年一〇月編集者となる）には、どのような形で成長するのであろうか。これを一言でいえば、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』Das Wesen des Christentums に感銘し、この影響をうけてますますヘーゲル哲學批判を押しすすめた、という點である。だが、バウアーなどのいわゆるベルリンの「自由人」Freien に反對したのとおなじく、フォイエルバッハの宗教批判を超克する素地があつた、こともみのがせない事實である。マルクスはこの時期に主力を『ライン新聞』への寄稿と編集においていたことはいうまでもない。この新聞を根據として、なによりもまずドイツの進歩的分子を廣く結集してウィルヘルム四世の反動體制である封建的絶對主義 Feudaler Absolutismus に對決した。當時の激しい出版の自由への壓迫に抗してブルジョワ・民主主義革命を準備することが、大きいマルクスの實踐的課題なのだ。だが、ここに注意すべきはおなじく反封建の旗じるしの下に闘う「自由人」グループの革命コースとも對決したということである。すなわち、これらの青年ヘーゲル主義者たちは、一つには共産主義的な空文句を輕々しく劇作批評に織りこんで、自由主義的新聞への壓壓をまねくような眞似をした。こうした態度は、巧みに檢閲をくぐりぬけながら根づよく反封建闘爭を展開しようとしたマルクスには耐えられなかつたのである。しかも、かれらは政治的に未成熟であつたので、宗教批判にかれらの活動をとどめ、無神論を宣傳するだけにおわつた。だが、マルクスは宗教批判 Kritik der Religion は政治批判 Kritik der Politik にまで具體化されなければドイツの

スタトウス・クォに止めを刺すことができないことを、はつきり見ぬいていた。「わたしは宗教において政治事情を批判するよりも、政治事情において宗教を批判することを要望する」と。このことのうちと、フォイエルバッハの唯物論的な宗教批判をも克服しようとする意圖ができているのである。

では、他方でこの時期のヘーゲル批判はどうであるか。基本的にはマルクスは青年ヘーゲル主義よりも、よりヘーゲルを理解していたことは、先の論文の時代から一貫している事實なのだ。そしてヘーゲル辨證法を根本的に變革するにいたつていないことも、なんら變らない。だが、マルクスが『論文學位』で提起したプログラムを、ブルジョワ・民主主義的出版人として政治に具體化したために、以前よりもヘーゲルに批判的となつた、といえよう。まず第一に、「個々の存在を本質に、特殊な現實をイデーにてらして測定する」というとき、ヘーゲル哲學の觀念論的くさみはおおいえないけれども、このイデーつまり國家のイデーはヘーゲルの意味するものでなくて、ジャコバンの革命的・民主主義的國家のイデーなのである。第二には、マルクスはイデーと現實とをヘーゲルのように客觀的觀念論的に同一視していた。だからこそ、カントやフィヒテのように、イデーで現實を測るにあたつて抽象的なゾルレンをもちださずにすんだのである。ところで、ヘーゲルではイデーと現實との同一化は現實との和解 Versöhnung をのみ意味したのであるが、

マルクスは既存の現實との妥協を放棄し、この同一化の革命的側面、つまり現存の社會狀態は世界史的・哲學的意味でなんら現實性を要求できないという思想を主張したのである。

このようにして、マルクスはヘーゲル辨證法のふところにありながら、それにたいして次第に批判的となつてくる。この批判的視點は、『ライン新聞』の編集者を辭めてから、『ヘーゲル法哲學および國家哲學批判』の研究にたずさわつた時期（一八四三年三月から八月まで）には、もはやヘーゲルの個々の部分にたいして向けられるのではなくて、その根本的・變革的な批判が問題となつてくる。このことはマルクスの發展が質的な轉換點に立つたことを、つまり唯物論を自分の哲學の基礎にすえたことを意味する。『ライン新聞』の段階では、まだ客觀的觀念辨證法の立場にとどまつていて、それを革命的・民主的に展開させたにすぎなかつたが、この段階ではヘーゲル法哲學の根本問題であるブルジョワ社會 Bürgerliche Gesellschaft と國家 Staat との關係に立ちむかうことによつて、ヘーゲル哲學の觀念論そのものと決裂する。この批判の根據をあたえたのは、いうまでもなく先に述べたフォイエルバッハの唯物論である。フォイエルバッハは『哲學改革の暫定的テーゼ』Vorläufige Thesen der Reform der Philosophie でヘーゲル觀念論の神祕性を唯物論の立場から批判した。ヘーゲルは自然や物質をば、なるほど精神から切りはなして、自立させはする。だが、それはどこま

でも精神の外在化でしかないために、再び精神のもとに止揚され、そこへ歸つて安らうことになる。とすれば、神學も一度は否定されながらも、またより高次の段階でそれが再興されることになりはしないであろうか。このような神學の辨護になるのも、實は思惟を根底においていて、そこから存在を說明しているからである。この立場に立つかぎり、正しい宗教批判はおこなわれないし、したがつてドイツの身分的專制主義を結局は承認することにもなるであろう。存在と思惟との關係は逆轉させねばならない。「思辨哲學一般の改革的な批判の方法は、すでに宗教哲學において適用された方法とちがつたものではない。われわれはつねに述語を主語に、そしてこのように主語として客觀および原理にさえすれば、おおわれざる、純粹な、あきらかな眞理をもつのである」（波岩文庫版五頁）。マルクスはこうしたフォイエルバッハの立場にたち、ヘーゲル哲學を根底から批判した。もつとも、このばあいにもフォイエルバッハの唯物論を全面的に受けいれたのではなく、「かれの箴言はあまりにも自然に言及しすぎて、政治にはあまりにも言及してはいない」といつて、フォイエルバッハへ不滿を洩らしている。だから、フォイエルバッハへの接近ずらもはじめからその批判の萌芽はあつたのだ、けれどもこの段階ではマルクスの基本線はやはりフォエルバッハにあつたのであつて、この立場からヘーゲル法芽は哲學批判へ向つのたである。ではどのようにか。

マルクスはヘーゲル觀念辨證法が究極的にはプロイセンの絕對主義の擁護になるという批判を、その國家論において分析した。ここでマルクスの批判性をもつとも、はつきりあらわしている論點をあげれば、ブルジョワ社會と政治國家との分裂と和解の辨證法である。ヘーゲルがこの二つの領域を分離しそれを對立 Gegensatz においてつかんだことを、マルクスはきわめて高く評價する。「ヘーゲルは國家という即自的・對自的に存在する普遍者を、ブルジョワ社會の特殊的な利益と欲求に對立せしめた。一言でいえば、かれはいたるところでブルジョワ社會と國家との闘爭を表明したのである。」（マルクス、『國法論批判』303節）だが、これら兩者の對立を解決できなくなると、ブルジョワ社會が中間物 Zwitterding であるとして普遍者である國家へと解消してしまう。「ヘーゲルはブルジョワ社會と政治國家との分離を知つている。だがかれは、國家の內部に兩者の統一があらわれ、しかもそれは、ブルジョワ社會の諸階級が同時にそのものとして立法的社會の階級的要素をなすというように、完成さるべきだ、と要求するのである」。ここで階級は本來、兩者の矛盾であるはずであるのに、兩者の統一をあらわしているのだ。だからヘーゲルでは、この關係は逆立ちしている。マルクスはこの點を批判してつぎのようにいう。「家族とブルジョワ社會とは自己自身を國家とする。それらは活動力をもつているのだ。だが、ヘーゲルではそれらは現實的イデーで

動かされる。、、、その『現實的イデー』は家族やブルジョワ社會においてはただ有限的なものとして低い價値しかもたないのは、實はそれらを止揚することによつて、國家のうちで無限性をうけとり、そしてそれをつくりださねばならないからだ。、、こうして（ヘーゲルで）出發點とされている事實は事實そのものではなく、むしろ神祕的成果としてつかまれている。、、この節（二六二節）で法哲學の神祕性全體は克服された。こうしてヘーゲル哲學一般のそれも克服されたのである」（マルクス『國法論批判』二六二節）。と。ここでマルクスが「法哲學批判からヘーゲル哲學一般の批判」といつている意味は、こうだ。ヘーゲル辨證法の止揚の形態と鬪爭するのである。「現實的な兩極は相互に媒介されることはできない。なぜならそれらは現實的な極だからである」（マルクス三〇七節）。マルクスはこうして、この時期に「ヘーゲル法哲學批判」をとおして、さらに究極にまで、つまりヘーゲル辨證法そのものの批判にまでつきすすんでいたのである。

三、Ⅳ『革命的民主主義からプロレタリア社會主義』への移行は、Ⅴ『獨佛年誌』とⅥ『經濟學・哲學手稿』でおこなわれる

われわれはいままで、マルクスがヘーゲル批判を唯物論の立場からいかに展開してきたかを、ざつとみてきた。そしてこの

ことは、ドイツの封建的絕對主義に對決する急進的民主主義者の政治的課題と對決していた。だが、このイデオロギー上と政治上での鬪爭は、『獨佛年誌』Deutsch—Französische Jahrbücher の時期にきわめてはつきりする。この段階で問題となるのは、ルーゲ、フォイエルバッハおよびバクーニンとの『往復書簡』Briefwechsel（一八四三年三月—九月）、ならびに論文『ユダヤ人問題によせて』Zur Judenfrage（四三年秋）、『ヘーゲル法哲學批判序說』Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. Einleitung（四四年はじめ）である。マルクスはこれらの勞作のなかで、當面する革命の原動力と目的を以前より具體的に規定した。もとより來るべき革命がブルジョワ民主主義革命であるとする點では、以前となんら變らない。だが、この時期に、マルクスはドイツ・ブルジョワジーがこの革命にたいしてきわめて臆病であつて、よくこの革命を擔いえないことをはつきりみぬいた。そしてドイツ・ブルジョワ革命はプロレタリアートを中軸とする國民大衆でなければならないことを、理論づけたのである。もつとも『ライン新聞』時代にすでに、新聞株主のくだらぬ態度をきらつていたし、森林盜伐法問題で大衆に味方し、ジャコバンのマラーからバブーフへの道 Weg von Marat zu Babeuf をたどろうとしていた。だから、この時期では以前のこうした萌芽がはつきり革命に對する態度となつて規定されたのだ、といえる。しかも、ルーゲのように「ドイツ人は鬪爭

する黨派とはならない」という悲觀的な見とおしに反對して、ドイツでの資本主義の發展は、やがて産業によつて團結し、そして思考しはじめる國民大衆を作りだすのだ、しかもこれらの力が結集すれば、專制主義やそれを積極的に補う俗物ども（ドイツのブルジョワジー）を、いずれは破ることができる、と力説した。このような構想は完全な形では『共産黨宣言』で定式化される。さしあたりまだ『ヘーゲル法哲學批判、序説』ではドイツについてしめされているすぎない。だが、このようにブルジョワ民主主義革命のなかでのプロレタリアートの指導性とこの革命のプロレタリア的社會主義革命への轉化という構想が『獨佛年誌』の時期にあらわれたことは、マルクス思想の質的な轉回であるといわねばならない。だから、ブルジョワ的地平を超えて、ジャコバン・ラインをマルクスが擴大したことは、のちにブルジョワジーの理性に訴えるすぎない空想的社會主義にマルクスを對決させたのである。マルクスはフランスの空想的社會主義をとりあつかうまえに、すでにことを批判し克服する決定的視點をつかんでいたといえるのである。

とはいうものの、『獨佛年誌』の段階でも『往復書簡』や『ユダヤ人問題によせて』では、まだ以上のようなはつきりとした構想があらわれたとはいえない。たとえば、この後者の論文では、フォイエルバッハの人間學的唯物論の立場で、ブルーノ・バウアー批判をおこない、現在のブルジョワ社會におけるユダヤ人解放の可能性をついてゆくことによつて、ブルジョワ社會の内的矛盾性を暴露する。マルクスはここでは宗教はユダヤ教であろうとキリスト教であろうと、社會的諸關係の幻想的な反映であることをあきらかにする、ととに、政治的解放Politische Emanzipation と人間的解放 Menschliche Emanzipation とを區別し、政治的解放とは既存の世界秩序内部での進歩をしめすにすぎない、がこれに反して人間的解放とは、ブルジョワ社會で人間が疎外されている姿を止揚してはじめてえられる、つまり根本的に新しい社會秩序をうちたててはじめて可能になるのだ、以上のようにマルクスは主張するのである。封建社會から國民社會へと政治的に解放されたところで、それは封建社會が利己的な人間に分解されただけである。「だから、人間は財産から解放されたのではなく、財産の自由をえたのである。人間は、營利の利己主義から解放されたのではなく、營利の自由をえたのである」（『ユダヤ人問題によせて』選集補卷四、一五九頁）。資本主義社會にあるかぎり、人間のこうした分裂狀態はなくなるものではない。むしろ、すべてのものが商品化され物化された私有財産の世界にこそ、非人間化された生活の基礎があるのだ。だから、このブルジョワ社會を廢棄せずには人間は解放されない。「現實の個別的人間が抽象的公民を自己のうちにとりもどし、個別的人間のままで、その經驗的生活、その個人的勞働、その個人的諸關係において類的存在となるときには

じめて、人間的解放は成熟されたのである」（補卷四、一六一頁）。このようなマルクスの批判は、フォイエルバッハの「現實的人間主義」der wirkliche Humanismus の形態においてではあるが、ブルジョワ革命と社會主義革命との對立がのべられている、とともに、そこからブルジョワ社會の內的矛盾があきらかになる基礎があたえられているといえよう。

このように、『ユダヤ人問題によせて』ではブルジョワ社會の矛盾した姿がでてきているとはいえ、人間的解放をおこないうる階級闘爭については、なんら問題の提起はない。この點で、『ヘーゲル法哲學批判、序說』がはじめて摘取される國民大衆の闘爭を問題とするのである。この課題はフォイエルバッハの人間學的唯物論 Anthropologischer Materialismus に史的唯物論 Historischer Materialismus を對置することによって果された。では、どのようにか。もちろん、「宗教批判はあらゆる批判の前提」をなすものであるが、ドイツではこの批判はフォイエルバッハでおわりをつげた。この點ではマルクスはフォイエルバッハの思想を高く評價する。だが、「フォイエルバッハは宗教的本質を人間的本質に解消させる。ところが、人間的本質はけつして個々の個人に內在する抽象體ではないのである。人間的本質は、その現實においては社會的諸關係の總和である」（選集第一卷七頁）。このマルクスのフォイエルバッハ・テーゼは、實は『序說』を展開させる軸、つまり史的唯物論による

人間學的唯物論の克服の積杆となつているのである。いまや、宗教批判は市民社會そのものの批判に向わねばならない。哲學の領域ではきわめて高い水準にあったドイツ哲學は「他の國民が實行したことを政治のうえで考えた。ドイツは他國民の理論的良心であった」（『ヘーゲル法哲學批判序說』補卷四、一八三頁）。だが、哲學を止揚し、實現するモメントは國民における現實の欲求 die reale Bedürfnisse im Volke である。「理論が一國民において實現されるのは、ただそれが國民的諸要求であるかぎりである」（補卷四、一八五頁）。この現實的要求にもとづいて、階級が結成され、これが革命を推進するのである。ところで、ドイツでは哲學批判を現實的批判である革命に轉化する條件はあるだろうか。たしかに、フランスでは一定の階級利害に基づいてブルジョワ階級が封建社會にたいして闘爭することができた。だが「ドイツのどの特殊階級にも、首尾一貫性、鋭さ、勇氣、かれらに社會の否定的代表としての刻印をうたせることができる決然さが缺けているばかりではない。同樣にどの身分にも：革命的な大膽さが缺けている」（補卷四、一八八頁）。第三身分の內部で階級對立が生じたあとでは、ドイツにはブルジョワジーがブルジョワ革命を指導することはできなくなった。マルクスはすでに四八年革命の四年前にブルジョワジーにみきりをつけ、ドイツでは政治的革命（ブルジョワジーによる民主主義革命）は生じないと斷言し、政治的革命は人間の解放

に轉化しなければならないことを主張した。この解放の擔い手こそ、「人間性の完全な喪失であり、したがつて人間性の完全な回復によつてしかみづからをかちとることのできない一階層。一つの特殊身分としての社會のこの解體こそ、すなわちプロレタリアートである」（補卷四、一九〇頁）。このようにして辨證法が唯物論的に變革され、現實的人間主義が人間學的限界をこえて、プロレタリアートのうちにその力をもつとともに、プロレタリアートも哲學によつて武裝して、はじめて、哲學は實現するのであり、「人間へのドイツ人の解放は成就されるだろう」（補卷四、一九一頁）。

以上のように『ヘーゲル法哲學批判序說』で展開されたマルクスの質的に新しい構想は、『經濟學・哲學手稿』Oekonomisch-philosophische Manuskripte（一八四四年）でいよいよ深められて確立された。この時代にマルクスはフランス革命史の研究を始めるとともに、エンゲルスの『國民經濟學批判大綱』に大いに刺戟をうけ、イギリス古典經濟學の研究をはじめた。そして、この經濟學研究がヘーゲル辨證法の克服、さらにはフォイエルバッハの人間學的唯物論の克服に大いに影響をおよぼした。マルクス形成における『經濟學・哲學手稿』の方法論的意味は、實にこの經濟學と辨證法がたがいに結びつきあつて、マルクスの唯物辨證法の基軸となつたという點である。この點はルカーチ思想のきわめて大きい特色であつて、『若きヘーゲル』の中心テーマでもあつた。というのはこうである。ヘーゲルの本質やその歷史的位置づけは、古典經濟學と對置させてはじめてはつきりと理解できる、とともに、古典經濟學がとりあげた法則は、唯物論的に顚倒させた辨證法の光にあててこそ、ブルジョワ理論の限界から超克できるのである。

『手稿』はこのような意義をもつているから、マルクスはここで古典經濟學とヘーゲル辨證法とは、唯物辨證法にとつてきわめて大きい影響をおよぼすとともに、いずれも資本主義社會の矛盾を最高度にイデオロギーのうえに反映したものとしてつかんだ。では、兩者の意義と限界は一體どこにあるのだろうか。近代國民經濟學は勞働をその體系の中心にすえ、すべての經濟學のカテゴリーを勞働に還元した。この思想は正しいといわねばならない。だが、同時に勞働の擔い手であるべき勞働者が資本主義社會では疎外されているということも、示している。マルクスも勞働のこの矛盾した事實から出發して、資本主義における勞働がいかにして勞働者を勞働そのものから疎外し、また勞働が人間を自然から、人類から疎外し、また、人間の疎外された勞働の事實から資本主義における階級對立が和解できないことを見ぬくのである。だが、近代國民經濟學は「疎外された勞働の法則のみをしめす」（補卷四、三一三頁）にとどまつて、この法則を歷史的・概念的に展開できなかつた。

「それは私有財産が現實にへてゆく物質的な過程を一般的・抽象的公式でとらえ、つぎにこれをみづからの法則として通用させる。それはこの法則を概念的にとらえない。また、それは展開すべきものをかくしこんでいる」（補卷四、二九六頁）。というのはそれは、資本主義を永久なるもの、自然にあたえられたものとみなし、その地平を超えることができなかつたからである。

マルクスによれば、ヘーゲルも「近代國民經濟學の立場に立つていた」（補卷四、四〇四頁）。つまり、かれは「人間の自己生産を一つの過程としてとらえ、對象的人間を、現實的であるがゆえに眞なる人間を、彼自身の勞働の成果としてとらえた」（補卷四、四〇三頁）。このように、人間が勞働によつて自己を對象化するというのは、きわめてすぐれた否定性の辨證法であり、ヘーゲル哲學の中心である。そして、この外在化のカテゴリーのためにこそ、ヘーゲルは近代國民經濟學の水準に達したのであり、唯物辨證法に大きい影響をおよぼしたのである。だが、ヘーゲルは對象性一般と資本主義における非人間的疎外 Unmenschliche Entfremdung とを混同し、そして觀念論的な仕方で、前者のみを止揚したのであつて、後者を止揚したのではなかつた。この點が、ヘーゲル辨證法の大きい缺陷である。そして、このようになるのは、ヘーゲルは勞働の積極的側面のみをみて、その否定的側面をみなかつたからである。かれにとつて對象性は一般に精神の外在化として、つかまれているにすぎない。このような考え方では、資本主義社會における疎外の眞の形態をつかむことができない。そのためには、人間を感性的・身體的存在としてとらえねばならない。しかも人間は單なる自然的存在であるだけではなく、自然的存在として同時に自然にたいして生産活動をする存在である。このことによつて人間は感性的存在としての對象化ができ、自己を感性の對象とすることができる。「歴史は人間の眞の自然史である」（補卷四、四一一頁）とは、人間がこのような感性的存在として生産實踐をおこなうからである。かくして對象化理論の觀念論的限界は克服される。さらに、ヘーゲル辨證法には、止揚についての大きい誤りがある。それは、否定の否定において外在化の止揚を考えているが、先にもみたように、このことには「他在そのものにおいて自己自身のもとにある」（補四、四一三頁）という考え方がある。だから、人間は現實に疎外を止揚せずとも、「法、政治などのなかで外在化された生活をとなんでいることを認識」すれば、かれは「この疎外された生活そのもののうちで、かれの眞實の人間的生活をいとなむ」（補卷四、四一四頁）ことになるであろう。

このようにみると、ヘーゲルと古典經濟學とは、疎外において勞働の意義をみとめた點できわめてすぐれた認識をもつとともに、兩者のあいだには共通性がみられ、これがマルクスに大き

い影響をおよぼしたのである。だが、かれらはいずれもおなじように勞働の疎外の法則を固定化し、ブルジョワ的地平から拔けだしえなかつた。このような立場に立つかぎり、三月革命におけるプロレタリアートの任務を理論づけることはできない。このためには、それらの限界を唯物辨證法で克服しなければならない。マルクスは二つの偉大な先行の思想を現實的止揚ein wirkliches Aufheben を設定して克服した。「私有財産の思想を止揚するには、思想的な共産主義でじゆうぶんである。現實の私有財産を止揚するには、現實的な共産主義的行動を必要とする」(補卷四、三七〇頁)。かくして思想的疎外は現實的疎外へとおさかえられ、したがつて外見的止揚が現實の止揚つまり革命へと轉化させられるのである。この現實的止揚の辨證法こそマルクス唯物辨證法の核心であり、人類發展の經濟力の辨證法なのである。そして、この唯物辨證法の完成は古典經濟學を社會主義の立場からの批判によつてのみ可能である。さらに、この究極的立場はマラーからバブーフへの道、ドイツにおけるプロレタリアートの階級的立場なのである。

プロレタリアートの立場から、マルクスは『手稿』で經濟學と辨證法を相互に媒介させて、唯物辨證法を確立した。そしてこの『手稿』段階の政治的裏づけをなすものが、『一プロシャ人著、プロシャ王と社會改革』などの諸論文である。「義人同盟」Bund der Gerechten にくわわり、シレジアの織匠一揆にふれて、マルクスは唯物辨證法の實踐化、つまり社會主義革命の重大性を論證したのである。

四、むすび

以上でルカーチのマルクス理解をば、そのあらましだけふれえたにすぎない。最後に、この論文にたいするわれわれの問題點をあげよう。なに分にも紙數にかぎりがあるので、個々の點にわたつてはとうてい論じつくされないし、またこの紹介の課題でもない。これについては、他の機會にゆづるとして、ここでは大きい問題點のみを示すにとどめよう。まず讀んで感ずるのは、『共産黨宣言』を背後において、マルクス思想をばその萠芽形態から唯物辨證法への志向をもつものとしてとらえられている。だから、きわめてあまりにも生氣はつらつたるマルクスが登場している。この點が、まえおきにも書いたようにルカーチの特色であり、『若きヘーグル』にもおなじことがいえる。もつとも、ルカーチはこの點をなんら意識していないわけではないが、初期にはもつとヘーゲルや青年ヘーグル主義の臭味をおびているマルクスを畫くことが重大ではないか。このようにとらえてこそ、マルクスがそれらに對決して史的唯物論を打ちだす過程がよりはつきりつかまれてくるし、眞實のマルクスに接近しうるであろう。

第二に、この論文の中心テーマはどこまでもヘーゲルとマル

クスとの關係に焦點がしぼられている。そのかぎり、マルクス主義の他の二源泉、すなわちフランス社會主義とイギリス古典經濟學の繼承の問題が唯物辨證法形成の契機として入ってくるのは、當然であるといえる。だからこそ、三源泉を單に外面的にむすびつけるだけの機械的なマルクス理解を克服できたのである。しかも、マルクスの骨組となる社會主義を單にフランスからの直輸入とする皮相的見解にたいして、ドイツの社會主義運動または勞働運動を足場にし媒介として、この側面を理解しようとしていることも、現在のマルクス理解に示唆的であろう。ただ、フランス社會主義のドイツへの影響という論點、つまりドイツ社會主義運動と思想が、ここでは中心ではないために、ごく簡單にふれられているにすぎないから、ルカーチの殘した問題としておこう。また、「社會主義的立場」は、フランス革命におけるバブーフの線とおいており、空想的社會主義は急進ブルジョワ的だとしてマルクスの否定すべきものであったこと、また、この段階までではむしろフランスの革命史の研究がマルクスに大きい影響をもったということ、をルカーチが示していることも、特色があるのでつけ加えておきたい。

最後に、古典經濟學との關係について一言しよう。ことに『經濟學・哲學手稿』で勞働把握を軸として辨證法と經濟學との相互關係、つまりヘーゲル辨證法とイギリス古典經濟學の媒介をみ、この兩面批判によってマルクスが唯物辨證法を形成し

えた、としている點は正しい。辨證法はもはや觀念的世界から現實の經濟力の客觀的運動法則であり、プロレタリアートの現實的疎外からの回復の歴史的法則である。ここでは、私有財產すなわち資本主義社會での資本の矛盾が、つまり資本主義社會の階級對立がはっきりつかまれていることはいうまでもない。たしかに、ここでは『ドイツ・イデオロギー』からさらに『資本論』に展開されるマルクス思想の原形はみられる。だが、辨證法と經濟學とのより具體的な關係、ルカーチの問題點である經濟學による唯物辨證法の具體化は、さらに『手稿』以後のマルクス形成を追求しなければならない。ことに唯物史觀の確立の指標點とみられる『ドイツ・イデオロギー』との關係が、あきらかにされねばならないのである。